

「法隆寺地域の仏教建造物」世界文化遺産登録25周年記念セミナー



「聖徳太子のおもかげに会う斑鳩」開催記録

2. 聖徳太子と法隆寺



● 開催日時・場所

- ・平成30年10月20日（土曜日）
午後1時30分～午後3時（開場：午後1時）
- ・朝日カルチャーセンター 朝日JTB・文化交流塾（新宿教室）
（東京都新宿区西新宿2-6-1 新宿住友ビル10階）

● 講師



法隆寺 管長 大野玄妙 師

● 司会進行

斑鳩町役場 総務部まちづくり政策課 課長 佐谷 容子

- 大野管長と斑鳩町教育委員会事務局生涯学習課参事・考古学技師 平田政彦氏
による対談のようす



13 : 00		<p style="text-align: center;">～開場～</p>
13 : 00	<p>まちづくり 政策課 佐 谷（以下、 佐谷）</p>	<p>本日は、「法隆寺地域の仏教建造物」世界文化遺産登録25周年記念セミナー「聖徳太子のおもかげに会う斑鳩」にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。</p> <p>本日のプログラムは、予定どおりこの後、午後1時30分に開演いたします。</p> <p>本日、朝日カルチャーセンター・朝日JTB交流文化塾の受付奥のスペースで、斑鳩町の観光PRブースを開設しております。観光パンフレットのほか、斑鳩ブランドに認定されているおいしい食べ物や、斑鳩らしいグッズの販売もあわせて行っておりますので、是非お立ち寄りください。</p>
13 : 25		<p>本日は、「法隆寺地域の仏教建造物」世界文化遺産登録25周年記念セミナー「聖徳太子のおもかげに会う斑鳩」にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。</p> <p>本日のプログラムは、予定どおりこの後、午後1時30分に開演いたします。終了予定時刻は午後3時となっております。</p> <p>開演までのお時間をお借りしまして、本日、参加記念品としてお配りしております、「わたしだけの斑鳩時間」について、ご紹介させていただきます。</p> <p>「わたしだけの斑鳩時間」は、斑鳩町の郷土史家・蔭山精一さんの文章とデザイナーの坪岡徹さんのイラストによる、知る人ぞ知る斑鳩の歴史秘話を2話ずつペーパーにまとめたミニガイドで、全30編あります。</p> <p>本日は、そのなかから、「後嵯峨上皇の御幸と松並木」「法隆寺参道入り口の並松と地藏堂」をプレゼントさせていただきました。本日、ロビーで、「わたしだけの斑鳩時間」全30編を販売しておりますので、ご希望の方はお買い求めください。</p> <p>ご来場の皆様をお願いを申し上げます。開演中、携帯電話をお持ちの方は、電源をお切りいただくか、マナーモードにさせていただきます</p>

13 : 30	佐谷	<p>よう、お願いをいたします。</p> <p>それでは、開演まで、しばらくお待ちください。</p> <p>みなさまこんにちは。</p> <p>ただいまから、「法隆寺地域の仏教建造物」世界文化遺産登録25周年記念セミナー「聖徳太子のおもかげに会う斑鳩」を始めさせていただきます。</p> <p>本日、司会進行を務めさせていただきます、斑鳩町役場まちづくり政策課の佐谷容子と申します。どうぞ最後までよろしくお願いいたします。</p> <p>それでは、主催者を代表いたしまして、世界文化遺産地域連携会議・斑鳩プロジェクトチームの委員であり、斑鳩町長の中西和夫（なかにし かずお）からご挨拶申し上げます。</p> <p>中西町長、よろしく申し上げます。</p>
13 : 31	中西町長	<p>みなさまこんにちは。</p> <p>ただいまご紹介いただきました、斑鳩町の中西でございます。どうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>「法隆寺地域の仏教建造物」世界文化遺産登録25周年記念セミナーの第2回目の開催ということで、第1回目に引き続き、たくさんみなさまにお越しいただき、本当にありがとうございます。</p> <p>今回は法隆寺管長 大野玄妙様にお越しいただき「聖徳太子と法隆寺」というテーマでご講演いただきます。大野管長様におかれましては、当事業にご理解いただきまして、本当にありがとうございます。また大変お忙しい中、講師を引き受けていただきまして、本当にありがとうございます。この聖徳太子ゆかりの地・斑鳩や法隆寺の魅力についてお話しいただけるということで、誠にありがとうございます。</p> <p>大野管長にご講演いただきましたあとには、大野管長様と当町教育委員会生涯学習課参事で考古学技師であります平田政彦による対談となっております。第1回目にお越しいただいた方もたくさんいらっしゃると思いますが、前回の内容も思い出していただきながら、</p>

13 : 33	佐谷	<p>この斑鳩の里を築かれた聖徳太子について、どんなお話がでてくるのか、楽しみにしていただければと思っております。</p> <p>さらに、斑鳩や奈良県の資源を生かしたお菓子やグッズなどを「斑鳩ブランド」として認定する、斑鳩ブランド創造事業を斑鳩町商工会と協働で行っております。先日9月26日に行われた認定審査会で斑鳩ブランドに認定されたお菓子やグッズなどを、本日、教室の外で販売しておりますので、数に限りはございますが、当セミナーの休憩時間、またセミナー終了後に、どうぞお買い求めいただきたいと思えます。</p> <p>簡単ではございますが、開会にあたりましての挨拶とさせていただきます。</p> <p>中西町長、ありがとうございました。</p> <p>ここで、私から、世界文化遺産・法隆寺のある町・斑鳩についてご紹介させていただきます。</p> <p>斑鳩町は、奈良県の北西部に位置する、古来からの交通の要所です。飛鳥時代、聖徳太子が寺を建てるのにふさわしい土地を探しておられたとき、龍田明神が白髪の老人の姿となって、「ここより東に斑鳩の里がある。そこに寺を建てなさい」というお告げがあり、聖徳太子は斑鳩の里に法隆寺を建立されたと伝えられています。</p> <p>また、聖徳太子は、斑鳩の里に「斑鳩宮」「中宮」「岡本宮」「葦垣宮」の4つの宮を造営し、一族で暮らしておられました。今なお、斑鳩には、聖徳太子ゆかりの寺社や史跡と、つみかさなる歴史が多く残されています。</p> <p>そして、西暦607年に法隆寺が建立されてから1400年、平成5年12月には、「法隆寺地域の仏教建造物」が、日本ではじめて、姫路城とともに、世界文化遺産に登録されました。</p> <p>このセミナーは、世界文化遺産登録25周年を記念し、文化庁の支援を受けて、開催するものです。</p> <p>本日のテーマは、「聖徳太子と法隆寺」でございます。</p> <p>まず、法隆寺管長 大野玄妙（おおの げんみょう）様にご講話を</p>
---------	----	---

13 : 35	大野管長	<p>いただきます。その後、大野管長と、斑鳩町教育委員会事務局生涯学習課 参事で、考古学技師の平田政彦（ひらた まさひこ）技師による対談を行います。</p> <p>みなさま、お待たせいたしました。法隆寺の大野管長、よろしくお願いいいたします。</p> <p>みなさんこんにちは。</p> <p>法隆寺をお預かりしております、大野でございます。どうぞよろしくお願いいいたします。</p> <p>みなさんのお手元に資料をお配りしておりますように、「聖徳太子と法隆寺」というテーマで、お話をさせていただきたいと思っております。</p> <p>みなさま、お気づきの方がいらっしゃると思いますが、先ほど司会の方から、607年に法隆寺が創建されたということに一応なっているわけですが、その607年に創建されたのは、聖徳太子様のお父様の用明天皇がご病気になられて、そのときに用明天皇が、「私はお寺を建てて、薬師如来を祀りたい。」という願いを持っておられ、「卿等（いましたち）あかれはかれ」と書いてありますが、そういう風な状況で建てられたということになっています。</p> <p>607年という年は、実は法隆寺の名前がその当時は「斑鳩寺（いかるがでら）」、斑鳩にあるお寺ということですが、そういう風に言われていましたが、その前年の606年には、既に「法隆寺、いわゆる斑鳩寺」ということは認識されていきました。というのは、推古天皇が、『勝鬘経義疏（しょうまんきょうぎしよ）』と『法華経義疏（ほっけきょうぎしよ）』の講演を聖徳太子に請われて、そのお布施料として、播磨国（現在の兵庫県）の水田100町を頂戴したということになっております。それを信じるならば、607年というのは、あくまでも完成したという感覚かなと思います。しかし、お父様の病気平癒のために建てられたわけです。しかもそのときの本尊は、「薬師の像を造って仕えたい」というわけですから、紛れもなく「薬師像」でなければならないわけです。ところが、現在、みなさまが斑鳩へ来ら</p>
---------	------	--

れて法隆寺を参拝されますと、法隆寺の金堂のご本尊はお釈迦様です。そこにひとつ食い違いが起こってくるわけです。

最近では、私もそうだと思いますが、670年（天智9年）に法隆寺が雷による火災で焼けて、その後建て直されたという風に考えられているわけです。ところがそうすると、もともとの法隆寺を建てたときに、お父さんの用明天皇のために建てたわけですから、なぜ薬師如来を祀ってあげなかったのかということになるわけです。これは大変大きな問題で、薬師如来像のうしろに銘文が刻まれておりまして、お父様の病氣平癒のために推古天皇と聖徳太子の2人で建てたということが書かれています。

[レジュメ3ページ]そこで現在の釈迦三尊像の光背銘文を見てみますと、レジュメの右下の黒い部分は光背銘文の写真ですが、これの文面は、写真の上にある漢字ばかりが並んで載っている部分になりますが、これによると、

「法興元（がん）三十一年 歳（ほし）は辛巳（かのとみ／推古二十九年）に次（やど）る十二月に鬼前太后（聖徳太子の母、間人皇后）崩（みまか）りたもう 明年正月廿二日。上宮法皇、病に枕して食を愈（よろこ）ばず 王后（膳妃（かしわでひ））勞疾（ろうしつ）を以て並びて床に着きたもう 時に王后王子等 また諸臣と深く愁毒を懷（いだ）きて 共相（とも）に願を發（おこ）す 仰ぎて 三宝に依り当（まさ）に釈像の尺寸玉身なるを造るべし 此の願力を蒙（こうむ）り病を転じ 寿（いのち）を延ばし世間に安住したまわんことを」

ここで一度区切りますが、これを読みますと、西暦621年に鬼前太后、「鬼前太后」といいますと、「鬼の前」と書いてなんと恐ろしいと思いますが、『上宮聖徳法王帝説』にはこれの説明が書かれています。それによりますと、

「鬼前とは、此れ神なり。～中略～故に神前皇后と稱（しょう）す

なり。」

そのように『上宮聖徳法王帝説』には説明がされております。つまり、「鬼」というのは実は「神」なのです。ですから、これはみなさん知っておられる方もいらっしゃると思いますが、昔からいろいろな歌の中で「鬼」と表現されている場合には「神」と理解した方がわかりやすい場合があります。古いことを言えば、あまり良いことではない話なのですが、人々の世の中を良くするためとか、いろんな目的のために、生贄（いけにえ）として人々が殺されたりするわけです。そのような関係で、人々はみんなを守るために亡くなっているわけです。そのような感覚があり、今では古い話になりますが、軍歌に「握れる銃（つつ）に 君はなお 国を護るの 心かよ」「われは銃火に まだ死なず」「君は護国の 鬼となり」というのがあったりしますが、つまり国を守るために鬼となったのだ、つまり鬼は神様という意味合いであります。余談になりましたが、そういうことで、「鬼前太后」とは、鬼の前、いわば神前皇后ということで、聖徳太子のお母さん、穴穂部間人皇后のことです。その方が西暦621年にこの世を去られたというわけです。12月21日ということになります。

そして、「明年正月廿二日上宮法皇、病に枕して食を愈（よろこ）ばず」とありますので、12月21日という年末にお母さんが亡くなって、それから1か月ほど経った翌年の1月22日に聖徳太子さんがご病気になられたということになります。

そしてさらに、今度は王后（膳妃）が看病疲れで病に倒れられて、床に就かれた。つまり、聖徳太子御夫婦で床に就かれたということになります。

それから、「時に王后王子等 また諸臣と深く愁毒を懐きて」ということで、周りの臣下や親戚の人たちが大変心配をして、「共相（とも）に願を發す 三宝に依り当（まさ）に釈像の尺寸王身なるを造るべし」ということで、みんなで心配をして願いを起こして、三宝（仏・法・僧）に頼ろうということでした。そして、お釈迦さんの像を造る、しかも聖徳太子さんの寸法と同じ像を造るということでした。つまり、

私ども（法隆寺）の本堂にあたります金堂に祀られているご本尊は、聖徳太子様と同じ寸法で造られているということになります。つまり、聖徳太子と同じ寸法の像を造ってこれをお祀りし、みんなの願力によって病を転じて命を延ばしたい。しかも、この世に長くとどまってほしいという願いを起こしたわけです。

この中で非常に重要なことがあります。というのは、法隆寺の金堂の場合も、やはり聖徳太子さんの病氣平癒のためにスタートしているわけです。いろいろ調べますと、飛鳥時代の仏教というのは、実は、ほとんど飛鳥時代の終わりの頃、つまり遣隋使や遣唐使が中国で学んで帰ってきて、中国の新しい宗教・新しい思想を持ち帰ってきて、広めていったのです。中国から持ち帰ってきたことを理解できるのは、だいたい奈良時代の早い時期くらいから後のことなのです。聖徳太子さんが亡くなったのは622年ですから、このころに仏教がどのような信仰をされていたのかということなのです。

これにはいろいろございしますが、中国から朝鮮半島を経て仏教が日本に伝わってまいります。公伝というものがあまして、公に仏教が日本に伝わったとされるのは538年というのが有力な説であります。一説には552年。どうしてそういったことが起こったかという、継体（けいたい）天皇から敏達（びたつ）天皇までの方々の在年数が全く異なっている資料があるわけです。同時に欽明天皇が即位されてから国を治める間の年数が全く違うわけです。先ほど引用しました、『上宮聖徳法王帝説』や、元の飛鳥寺である元興寺の縁起によると、『日本書紀』と記述が全く違っているわけです。なぜ『日本書紀』と縁起などとの記述が違っているのかということですが、記述が違っていても、書き直されていても仕方のないことなのです。

みなさんもよくご存じのように、正史というのは必ずある特定の人や特定の一族を持ち上げるために作っている部分があります。ですから、継体天皇から後に続く天皇に至るまでの間に、ややこしいことがあれば、少し忖度して都合の良いように修正している部分があるというのが一つあります。もう一つは、さまざまな伝承・言い伝えといったものは、みんなから聴取して、それを当時は年号で書かずに干支で

書かれているわけです。そうすると、年数的なことという、同じ年号が2回くらいは出てくるわけです。また並べ間違いも起こります。さらに、そういった伝承よりも、歴史書などを編むために集められた伝承というのがあるわけですが、それらが随所に何箇所か出てまいります。例えば『日本書紀』だけではなく、ほかの書物にも同じような記事が出てきたりいたします。伝承から書物となって出来上がるまでにかかなりの時間が経っているということです。現在、明治150年にあたりますが、明治の歴史ですらぐらぐら動いているわけです。そうすると、『日本書紀』が編まれたときに、飛鳥時代や、それよりも古い時代の歴史というものは一体どうなるのかというわけです。かといってそれをないがしろにしてよいのかというと、資料がないのでどうしようもないわけです。そういった事情があるため、「そういうことがあったのだろう」という程度に考えておいた方がいいのかなと思います。

仏教が538年に日本に伝わったとしますと、その仏教は一体どんなものだったのかということになるわけです。これは中央アジアから中国に入るときに例がありますが、自分たちが普段信仰している・信じている神様の考え方と全く同じあるいはよく似た神様が祀られていて、しかもその神様が隣の国の神様あるいは他の国の神様、あるいは仏（ほとけ）というところの神様、例えば『日本書紀』にも書かれている、「蕃神（ばんしん）＝隣の国の神様」「仏神＝仏（ほとけ）という神様」「他神＝ほかの国の神様」というのが入ってきたという感覚なのです。中国でも例があると申しましたが、中国でも初期の頃には、モンゴル高原から中央アジアにかけて暮らしている胡族の神様である「胡神」、それから「えびす＝西の方の人々が信仰している神様」「じゅうしん」、あるいは『日本書紀』と同じ「仏神」といったものが出てまいります。いずれにしても、自分たちが日ごろ信仰している神様と大して変りのない、しかし急に隣の国の神様を祀っていたら天つ神・国つ神はお怒りになるだろうということで、みんなが反対をするわけです。しかしそこで賛成したのが、蘇我稲目という人です。その賛成に天皇陛下は困られて、賛成した人に「それを祀りなさい」と

言って、蘇我稲目は喜んで仏様を持ち帰って、「向原（むくはら）の家を祓い清め寺とす」と書いてありますが、「祓い清める」というところに、昔からの日本のしきたりを踏襲しているわけです。さらに今度は、その仏に仕える3人を選び出します。この3人は「三綱」尼と言って女性です。一番上の人は11歳。昔からよく言われていることですが、いわゆる神様に仕える巫女さんのような認識であったんだろうということです。ところが、それからどんどん仏教がひろまっていきましたと、徐々に変化してまいります。そして、聖徳太子さんは特殊な事情があって、皇族でありながら蘇我氏を中心とする渡来系の人々と非常に仲が良かった。そして渡来人が信仰していたのが仏教で、しかも菩薩思想というものなのです。その菩薩思想とは、だれ一人として漏れることなく仏像を乗ずることができるという考え方です。そうすれば、今までの日本の国でご先祖方のお詣りしていた神様、あらゆる山や川をお祀りし、ご先祖方を大切にし、大地の恵み、あるいは大地の脅威を共有しながら、しかもこの限られた狭い地域で多くの人々が生きていくために、譲り合い、助け合い、労り合う、思い合う、といった心が育まれてきたわけです。それをきれいな形で行っていきたいということをお願い続けていくことが皇族の仕事なのです。

そういう風に考えますと、それぞれのみんなの願い、考え方が、大乘仏教の菩薩思想と、今まで私たち日本人がずっと長い間培ってきた、ご先祖から引き継いで来たものの考え方が、聖徳太子様の頭の中できれいに結びついているのです。そして、聖徳太子というひとりの人格を通じて、仏教が理解されていくわけです。ですから、よく言われるように、例えば「何々教」をみたときに、その経典が見つかり、「解釈が全く違うではないか」ということが起こりますが、起こって当たり前なのです。なぜかというと、日本人の心で新しく外国から入ってきたものを見ているからなのです。

そして続きを読みますと、

「若し是れ定業にして 以て世に背きたまわば 往きて浄土に登り 早く妙果に登らせたたまわんことを」

もしかして、世の定めであって、みんなの願いに相反して、この後が大事なのですが、「往きて浄土に登り」と書いてありますが、大変奇妙だと思いませんか。みなさま方の認識では浄土は登るところでしょうか。普通であれば「往生」ですが、ここでは「浄土に登る」と書いてあります。また、「浄土」という言葉が金石文として一番古いのは、この文章なのです。この「浄土に登る」ですが、どの経典を見ても、仏様の国土というものは必ず水平線上です。阿弥陀さんの浄土にしても、水平線上の西方十万億土という、とてつもなく遠いところにいらっしゃるという風になっています。我々は、阿弥陀経にも書いてあるので、理屈上はそう思っています。しかし、「仏さんの国ってどこにありますか。」と聞かれると、みんなは心の中は、水平線上にあるとは思っていません。みんな上を見ているわけです。もう既にその段階では、インドで興った仏教とは違うわけです。日本人が理解している仏教なわけです。だから、その当時の日本人が考えているような神様であったり、高天原（たかあまはら）、あるいはインドの神々も含めて、日本人は、神の世界というのは上にあると理解しています。ですから、仏に対する認識はかなり違います。

続きですが、

「二月廿一日癸酉 王后即世したまい」

つまり、622年の2月に聖徳太子の奥さんが先に亡くなった。

「翌日法皇登遐（とうか）したもう」

つまり、聖徳太子さんが亡くなった。

「登遐」とは亡くなることを言い、多く使われているのでご存知かと思いますが、ここでひとつ、「法皇」という言葉が出ております。これを頭の隅に置いておいていただきたいと思います。

そのあとに、

「信道の知識」

と出てまいります。 「信道＝道を信じる知識」、つまり仏教を信仰している、あるいは聖徳太子様の像を造るということを発願する仲間のことをいいます。例えばみなさんが、どこかのお寺が何かの修復をする、あるいは何かを建てたり事業をしたりするときに、その趣旨に賛同してご寄附なされたとします。そうしたら、ご寄附なされた方は「知識」なのです。

さて、先ほどお読みしました、「釈像の尺寸の王身」、つまり聖徳太子様の等身の像を造ろうと願いを起こしたわけですが、どこまでできたかは別問題として、「釈像の尺寸の王身」を造ろうと発願した時点では、まだ聖徳太子様は生きています。つまり聖徳太子様が病気で倒れたけれども亡くなられていない段階から、「釈像の尺寸の王身」を造ろうと計画を立てて、おそらくその計画がスタートを切っていたと思います。しかもお釈迦さんを造って、聖徳太子さんと寸法を同じにして、生きています人のために造っている。こういう例が外にあるのかなのかということが、私たちにとって一つ大きな問題なのです。

こうした例は、実はあります。中国の北魏の王朝のとき、文成帝という人が、雲崗の石窟、あるいはその前にお寺を建てていますが、五帝を供養するためにお寺を建てたということです。五帝というのは、北魏の王朝の最初とされております、道武帝、明元帝、太武帝、その次は皇太子で亡くなられた文成帝のお父さんにあたります「晃(こう)」という名前で、のちに景穆帝とよばれた人物、それから文成帝です。文成帝は生きながら、お釈迦さんの像を自分の供養のために造っています。こうした考え方が、聖徳太子さんの頃に伝わっていたということです。そして同時に、みなさんよくご存じの、小野妹子が607年に遣隋使として派遣されましたが、その時のことで皆さん思い浮かべるのが、「日出ずる処の天子 日没する処の天子・・・」という文言

です。これは、戦前からある意味政治的に利用されました。本当はそういうことは書いていません。その文言の前に書いてあることとして、中国の北魏と北周で大きな廃仏運動が起こります。そのあと復興したのが隋の文帝なのです。隋の文帝のことを知っていて、遣隋使を送り込んでいるわけです。ですから『随書』の「大業三年」というところには、「海西の菩薩天子」と出てきますが、これが文帝のことです。続きに「重ねて佛法を興すと」と出てきます。2回廃仏されているためです。その廃仏されていることをちゃんと知っていたわけです。しかも文帝が建てたお城「大興城（だいこうじょう）」、建てたお寺が「大興善寺（だいこうぜんじ）」です。ですから、その当時のものの考え方が伝わっていたわけです。ただし思想ではありません。

そして、（金堂釈迦三蔵像光背銘を）続けて読みますと、聖徳太子さんが亡くなって、

「癸未年（推古三十一年／623年）の三月の中に願の如く敬（つし）みて釈迦の尊像並びに狹侍（きょうじ／わきじ）及び莊嚴具を造り竟（おわ）りぬ」

つまり、像が完成した。3月中に完成したので、おそらく聖徳太子さんの一周忌に間に合わそうとして一生懸命工事を行ったのだと思います。しかし一周忌には間に合わず、少し遅れて3月中にできたというわけです。

そしてその続きに、

「生を出て死に入らば」

これも意味深な言葉ですが、私たちは必ず死にます。その意味合いです。

「三主（先に亡くなった穴穂部間人皇后と、聖徳太子のお妃膳妃と、

聖徳太子の3人)に随(したが)い奉り三宝を紹隆して」

つまり、死に入って、その先ででも三宝を広めて、

「遂に彼岸を共にし」

三宝を広めて、仏教の修業をして、ついに悟りに至りたい。

そして、そこから先が大事なのです。宗教的なことですが、これは623年に書かれているということは、こういうものの考え方をしていたということです。しかも、聖徳太子さんが生きていて書いたのであれば「三経義疏」や「十七条憲法」と比較することはありうる話ですが、実は聖徳太子さんではない。このとき聖徳太子さんは病気になって死にかけておられるわけですから。そういう人が書くわけがない。では、いったいだれが書いたのかということですが、よく恵慈法師と言われますが、恵慈法師は615年に帰国しているわけです。そういうことを勘案して、この当時、聖徳太子さんというような特殊な人以外でも

、聖徳太子さんの周辺の中にこれだけの文章を考える人がいたということです。

続いて読みますと、

「普遍の六道 法界の含識も」

普遍の六道、法界、含識とは誰のことでしょう。私たちみんなのことです。六道とは「地獄」「餓鬼」「畜生」「修羅」「人間」「天」で、そういうところの世界に迷っている人たちも含めてです。

「苦縁を脱することを得て」

迷い、苦しむ世界から解放されて

「同じく菩提に趣かんことを」

ここに書かれていることは、完全な私たちの理想的な菩薩思想です。なかなか私たちは、煩惱というものに侵されていて、日ごろから、何でも、いつでも自己中心的な考え方をします。いくら、一生懸命に修業し、立派な方でも、実際は煩惱というものからは逃れられません。そういうときに、迷いがあっても助かる道を追求していつているわけです。しかも、「菩提に趣かんことを」という文章から、みんな一緒に「菩提=悟り」に行くことを願いとして持っているわけです。つまり、釈迦三尊像を途中まで仕事して造っていましたが、途中で聖徳太子さんが亡くなってしまった。そこから先、完成するまでほぼ1年かかっています。その間にこの文（金堂釈迦三尊像光背銘）が考えられ、挿入されているわけです。

そして、その次に書いていますが、

「司馬鞍首止利（しばくらくりのおびととり）仏師をして造らしむ」

ですから、止利仏師によって造られたということです。

仏像の光背銘について、古いときの仏像で、作者がわかっているものは非常に少ないのです。この金堂釈迦三尊像光背銘には、はっきりと止利仏師と書かれています。そして同時に、例えば仏像を造っても、お寺に大きな仏像が造られても、その目的と仏像を造られた人というのは歴史でもよく出てきます。光背銘の作者はなかなか出てこないのです。

もう一つ、金堂釈迦三尊像光背銘とほぼ同じころのものだと言われている、「天寿国繡帳（てんじゅこくしゅうちょう）」というものがあります。中宮寺が所蔵しているものです。その「天寿国繡帳（てんじゅこくしゅうちょう）」ですが、みなさんの手元には資料がありませんが、これを読んでみますと、簡単に言うと、ほとんど前の方は、橘郎女（たちばなのいらつめ）が推古天皇とどういう関係かといった

ことを、昔の呼び名で書かれています。そして一番重要なのは、聖徳太子さんが亡くなったところですが、

「二月（きさらぎ）の廿二日の甲戌の夜半に太子（ひつぎのみこ）崩（かむさ）りたまいぬ。時に多至波奈大郎女（たちばなおおいらつめ）。悲哀（かな）しみ嘆息（なげ）きて。天皇（すめらみこと）の前に畏（つつ）しみ白（もう）して曰（もう）さく。之を啓（もう）すは恐れありと雖（いえど）も心に懐（いだ）いて止使（やみ）難し。」

推古天皇に、聖徳太子が亡くなったことをいうのが心苦しい。心の中でいろんなことを思うけれども、どうしようもない。

「我が大王（おおきみ）與（と）母王（ははぎみ）と。」

これは穴穂部間人皇后のことです。

「期（きま）りし如く従（したが）い遊びまして。痛酷（むご）きこと比（たぐ）い無し。」

酷い、そういう気持ちになっている。お母さんと旦那さんを亡くしているわけですから。

「我が大王の所告（のたま）いけらく。世間は虚仮（こけ）にして。唯（ただ）佛（ほとけ）のみ是れ眞（まこと）なりと。」

聖徳太子様はおっしゃっていました。世間は偽りである。ただ仏様の世界だけが真であると。

「其の法（のり）を味（あじわい）みるに。」

それを一生懸命考えてみると、

「我が大王は應（まさ）に天壽國之中（てんじゅこくのうち）に生まれまつらんとぞ謂（おも）う。」

聖徳太子様は、天寿国という国にいらっしゃるのだと思う。

天寿国とはどういう国かという、ここでは天寿国となっていますが、一般的には「无寿国（むじゅこく）」と捉える人もいます。「天」という字を書いてみてもらうとわかると思いますが、「天」に一つ点が入ると「无」という字になります。「无寿国」が阿弥陀さんの浄土を指すのだという人もいます。しかし正しいことはわかりません。

もう一つは「天寿国」ではなく「寿国」。「う」という字に右払いを足せば「天」という字になります。「う」は「宇」で、この字は置き字なので、「宇」を置き字と考えて読まずに「寿国」という人もいます。

しかしながら、一般的には「天寿国」と呼ばれています。これはおそらく、「天」に「月」や「太陽」といったものを表しています。「太陽」は、三本足の鳥を表しています。「月」は「うさぎ」と「かえる」を表しているようです。これは中国の神仙思想（しんせんしそう）からきています。

ですから、「浄土に登る」の「浄土」に対する考え方はというのは、実はこの段階では無茶苦茶。神様の世界なのか、仏教でいうところの「天」なのか、神仙思想の「天」なのか、いろいろな考え方があります。いずれにしても、漠然とこのように考えられてきたということです。

そして、

「而（しか）るに彼（か）の国之形は。眼（まなこ）に看（み）匡（がた）き所なり。」

天寿国という国の形は、どんななのか想像がつかない。

「稀（ねが）はくば圖像（ずぞう）に因りて。大王の往生したまえる状（さま）を觀んと欲（おも）うと。」

且那様が、今どうしておられるのか、図像で描いたものを見て眺めて、思っていたい。

「天皇之を聞こしめて悽然（せいぜん）たまひて告曰（のり）たまわく。」

それを聞かれた推古天皇は、非常に心打たれた。

「一（ひとり）の我が子有り啓（もう）す所。誠に以て然か爲（な）すと。」

その通りである。

「諸（もろもろ）の采女等（うねめたち）に勅（ちよく）して。繡帷（しゅうい）二張を造らしめたまう。」

天寿国繡帳の製作を推古天皇が命じた。

「畫（えが）ける者は東漢末賢（やまとあやのまけん）。高麗加西溢（こまのかせい）。又漢奴加己利（あやのぬかこり）。令せる者は棕部秦久麻（くらべのはたのくま）なり。」

天寿国繡帳を作った人は、東漢末賢・高麗加西溢・漢奴加己利の3人である。またこれを監督した人は、棕部秦久麻である。

このように、天寿国繡帳を作った人の名前が出ておりますが、これが事実ならば、釈迦三尊像よりも少し前にできあがっていることになる

のです。ところが、現存する天寿国繡帳は、どうやら途中で作り直されています。またそこに書いてある文字は、おそらく古いものを使ったのだらうと考える人と、新たに作ったのだらうと考える人と別れます。大まかに言えば、天寿国繡帳に書かれていることを信頼する人と信頼しない人がいるということになります。

いずれにしても、ごく限られたこの時期だけ、製作者がわかるということになります。これについては事実であろうと私も思います。

それから、薬師如来像は、斑鳩宮が焼けたときに一緒に焼けたのだらうというふうに思っているわけですが、薬師如来の銘文だけは古いものを踏襲して書かれているものだらうと考えられています。これらが大きな問題の一つとして考えておいていただきたいと思います。

それからもう一つは、先ほど「法皇」という名前を頭に置いておいてくださいと申しましたが、「法皇」が釈迦三尊像の光背の銘文に出てくるということです。なかなか「法皇」という名前を付けられることは少ないのですが、聖徳太子は古くから「法皇」という呼び方をされています。

〔レジュメ 4 ページ〕 さらにもう一つ、薬師如来の銘文の中にある文言ですが、非常に重要なのは、一番最後の行です。「東宮聖王」と書かれています。「東宮」というのは皆さんご存知のように、「皇太子」のことです。その「東宮」という名前が使われたのはもっと後の時代のことだと言われておりますが、ところが「東宮」という言葉がもっと早く使われていたのではないかという人もいます。

さらに、時代がややこしくなっている時期に考えておかなければならないと思うのは、天皇陛下が退位されて、皇太子様が天皇陛下になられるということは皆さんご存知だと思います。ではその「天皇」という名前がいつごろできたのかということです。一般的には大体天武朝くらいのことではないかと言われておりますが、実は中国の五胡の国には「天皇」を名乗った人がたくさんいます。それぞれの首長が隣の首長をやっつけて、自分が王になって、皇帝になり、さらに息子を皇帝にして、自分は「天皇」を名乗っている例もあります。ここでいう「天皇」は、私たちが仏教の中で「四天王」といった呼び名をします

14 : 25	佐谷	<p>が、そういったところからヒントを得て、中央アジア出身の遊牧の一族たちが「天皇」を名乗るようになったのではないかと思います。</p> <p>これで、終わらせていただきます。</p> <p>大野管長、貴重なお話をどうもありがとうございました。</p> <p>舞台転換を行いますので、しばらくお待ちください。</p> <p>このお時間をお借りしまして、私より、本日、配布しております資料のうち、「奈良・斑鳩 おとなの修学旅行」について、ご説明させていただきます。</p> <p>この冊子では、レンタサイクルをつかって、1日で充実した斑鳩を楽しむプランを紹介するとともに、たくさんの体験プログラムを紹介しております。</p> <p>「朱印帳づくり体験」「ラベンダークラフト体験」など、斑鳩町の事業所や寺社で、多彩な体験プログラムを斑鳩町商工会がご用意して、みなさまをお待ちしております。</p> <p>また、最後のページでは、斑鳩の美味しいお菓子や斑鳩ならではのグッズを選んだ斑鳩ブランド商品の紹介をしています。</p> <p>朝日カルチャーセンター・朝日 J T B 交流文化塾の受付奥のスペースで斑鳩ブランド商品の一部を販売しております。この機会にぜひお買い求めください。</p> <p>それでは、準備が整ったようです。</p> <p>大野管長、平田技師におかれましては、対談をお願いいたします。舞台のお席にご着席をお願いいたします。</p>
14 : 27	平田	<p>あらためまして、みなさんこんにちは。</p> <p>ただいまご紹介いただきました、私は斑鳩町教育委員会で文化財を担当している平田と申します。本日はよろしく申し上げます。</p> <p>ただいま、50分程度の短い時間ではございましたが、大野管長様から、法隆寺の中でも特にお寺の成り立ちや歴史、また飛鳥時代の仏教の思想や背景といったことに関する、重要な文献の記述に関する解釈についてお話しいただきました。</p>

法隆寺に行かれたことのある方はどのくらいいらっしゃいますでしょうか（挙手）。見たところ8割超える方がいらっしゃるかなと思います。

資料にもございましたが、特にいちばん初めの「国宝 釈迦三尊像」について、管長様からお話をいただきましたが、法隆寺に入られて西院伽藍を中門から見て左側に五重塔があり、右側に金堂があるという配置になっています。金堂は東側から入り中央の正面に向かうわけですが、本尊を安置する場所を専門用語で「内陣」と言いますが、これを見ていただきますと、中央に釈迦三尊像がいらっしゃって、東の間に薬師如来坐像がいらっしゃって、西の間に阿弥陀如来坐像がいらっしゃるという大きく3つの間があって、そして「須弥壇」と言ってもいいと思いますが、これが3つあるわけです。もちろん、中に柱があるわけではなく、仏像が並んでいる上に天蓋が3つあって、これが3つの空間を作っているような形になっています。ですから、釈迦三尊像がいらっしゃる場所は「中の間」と言ったりしますので、これにならって「東の間」「西の間」と言ったりします。管長様からお話もありましたように、釈迦三尊像は中央に祀られているわけですが、本来は薬師如来坐像が中央に祀られるべきであろうということですが、これについては、法隆寺の創建との関わりについて管長様からお話がありました。釈迦三尊像に刻まれている銘文は、事実であると考えてよろしいのでしょうか。

大野管長

はい。後ろの光背銘文はともかく、前の仏様自身は間違いなく銘文に書かれている時代のものであらうとされていたわけですが、一時、銘文は後の時代に刻まれたのではないかという説も出てまいりました。ところが、東野治之先生が銘文を調査されたときに、普通は前側だけ鍍金（とぎん）をするのですが、その鍍金が銘文の書かれている場所まで飛び散っていたのを見つけられました。そこから、像を造ったのと同時に銘文もできていたはずだということを証明されたわけです。それ以来、間違いなく623年に釈迦三尊像と銘文が造られたということになるわけです。

	平田	<p>今お話しいただきましたことですが、古くは戦前に福山先生がおっしゃられたように、「追刻」といって後で銘文だけを彫ったのではないかといった考えがありましたが、管長がおっしゃられた東野先生については、奈良大学の名誉教授でいらっしやいまして、「聖徳太子はいなかった」といったことが話題になったときも、毅然とした態度で聖徳太子の实在論を展開された方です。</p> <p>東野先生に、光背（仏像の後ろにあるもので後光が差している状態を示した部分）をこれをじっくり見ていただいたら、この光背と仏像本体との一体性があり、しかも光背の後ろに刻まれた銘文の内容も、仏像と同じ時期のものであろう言えるということをおっしゃられていました。この銘文は14字で14行という形で、きれいに中国風に整えられています。こうしたことから考えると、管長様がおっしゃられたように、聖徳太子がお亡くなりになられたのが『日本書紀』では推古29年の621年ということで伝わっておりますが、この光背銘によると推古29年ではなく推古30年であろうと考えられるわけです。ですから、お母様が亡くなって、聖徳太子ご夫婦が亡くなるのが622年ということになります。</p> <p>私は考古学が専門で、一番気になるところは、若草伽藍と言われている創建当時の法隆寺のことについてです。管長様、釈迦三尊像は若草伽藍で祀られていた仏像という認識でよろしいでしょうか。</p>
	大野管長	<p>いえ、おそらく釈迦三尊像は若草伽藍では祀られていなかったと思います。</p>
	平田	<p>そうですか。ではいつごろからどこで祀られている仏像でしょうか。</p>
	大野管長	<p>それが実はよくわかりません。いろんな説があって、説というのは想像になってしまうので、いくらでも説は立てられるのですが、聖徳太子さんが亡くなられてから、しばらくは「斑鳩宮」が存続します。</p>

ですから、宮内のどこかには祀られていたのだらうと思います。

そしてもう一つは、これもよくわからないのですが、夢殿の周辺から斑鳩宮の瓦の破片などが発掘されています。これを見ていると、宮殿の中に礼拝施設があったのではないかという考え方ができると思います。私は以前に、早稲田大学で話をしたことがあります。私は若草伽藍は創建当時の法隆寺であると思っはいるのですが、そのときにちょうど若草伽藍が見つかり、あまり深く精査せずに若草伽藍は創建当時の法隆寺であるという考えが広まったように思います。精査されてそういう考えに至ったのであればよいのですが、若草伽藍が見つかってすぐに若草伽藍が創建当時の法隆寺であるという考えが世間に広まったので、もっと調査をすべきではないか、という話をさせていただきました。

これは私たちにとって大きな問題で、聖徳太子さんが法隆寺を建てようと思われたときに、法隆寺を建てようと思われた時点がいつなのか、ということで、若草伽藍が創建当時の法隆寺であるか、どうかということが変わってくると思います。法隆寺を建てようと思われた時点が結構早い年代であれば、斑鳩に法隆寺を建てないと思います。飛鳥の方に建てると思います。おそらく法隆寺を建てようと思われたのは、恵慈法師が来日されてからのことではないかと思っています。恵慈法師の来日以前だと、少なくとも「三宝興隆の詔」の文言から考えて、「君親の為にお寺を建てる」というような文言がありますので、聖徳太子さんも、おそらくお寺を建てようと思ったに違いないのではないかと考えられます。しかし、実際にはいろいろな事情があって建てられなかったわけです。ですから、創建の計画なのか、着工なのかというところはあるのですが、斑鳩で建てられたという証拠を調査する必要があるのではないかと思います。

なぜそういうことを思ったのかというと、実は若草伽藍の推定伽藍とよく似た伽藍が、韓国の泗泚（しひ）城の中にあります。それは宮殿内の寺院です。ですから、斑鳩宮の宮内の寺院という可能性も拭えないのかなと思います。城内のお寺ですから、塔と金堂さえあればよ

	平田	<p>いわけです。講堂も必要なければ門も必要ありません。そういったことから、宮内のお寺という考え方も考慮しておかなければならないと思います。</p> <p>今、管長様からお話しいただいたようなことは以前にもお聞きしたことはあるのですが、現在法隆寺東院伽藍と言われている夢殿を中心としたエリアがあります。この部分についてはご存知のように、奈良時代に斑鳩宮の荒廃を嘆いて夢殿を建てて成立した法隆寺の別区画のようになっているところです。当時は「上宮王院」という名前もありました。ここを昭和の大修理に伴って戦前に発掘調査が行われています。この調査で、先ほど管長様からお話があったように、聖徳太子が601年に斑鳩宮を興す記事がありますが、その記事に見合うような建物跡が出てきました。これは専門用語で「掘立柱建物」というもので、土中に穴を掘り、そこに直接柱を据えて建物を建てるというものです。飛鳥時代に宮殿の建設でも用いられています。こうしたものが見つかり、斑鳩宮の跡であるということが解明されました。しかし、なぜかそこから少し古めの瓦が出土します。少なくとも聖徳太子が斑鳩の宮をお建てになった後で、斑鳩宮がなくなるのは、643年に、蘇我入鹿によって斑鳩が襲撃されるという事件が起きたときです。これは、聖徳太子は622年に亡くなっていますので、そのあとを継いだ息子の山背大兄王の時代のものです。この山背大兄王が斑鳩宮にいらっしゃったときにできたのではないかとされている瓦が、なぜか夢殿付近から出土します。</p> <p>ここで管長様のお考えをまとめてみますと、斑鳩宮の宮域内に仏像を安置するお堂、いわゆる「仏殿」というようなものがあったのではないかということです。そこに釈迦三尊像が安置されていたのではないかということです。</p> <p>このお話は、私たち考古学の者としては、若草伽藍を創建当時の法隆寺と考えておりますので辛いところです。実は考古学の間でも、古い瓦がなぜ夢殿付近から出るのかということは、まだ解決の見込みが</p>
--	----	--

		<p>ありません。しかし、私は法隆寺様のご理解を得て南大門の近くを発掘調査したことがあるのですが、そのときに若草伽藍のときに焼けた壁画の破片を発見しました。そのことを管長様にご報告させていただいたことがあり、そのお話しをお聞きしたことがあります。</p> <p>釈迦三尊像についてよく考えられているのは、若草伽藍で祀られていた、いわゆる「飛鳥仏」で、みなさまをご存知のように面長の顔をして、アルカイクスマイルと呼ばれる微笑みがあるといった、止利仏師が造った飛鳥時代初期のタイプの仏像ということです。釈迦三尊像自体は間違いなく古い時代のものですが、どこに祀られていたかということはまだ解明できておりません。</p> <p>管長様、薬師如来坐像についてですが、像は古いけれども、銘文自体は古いものをもう一度彫りなおしているという考えでよろしいでしょうか。</p>
大野管長		<p>そういう説があるということです。</p>
平田		<p>みなさんも興味のあるところだと思いますが、ご存知のように薬師如来坐像は、仏教美術の先生方の考えでは、どうも時代が新しいものではないかという説が強いです。創建当時の法隆寺は、天智9年（670年）に「法隆寺災いす」ということで、火災で罹災してしまいます。その際に、本尊であろう薬師如来像も罹災しているのだろうという考えのもと、こうした説が出てきています。</p>
大野管長		<p>銘文の話に戻りますが、607年の法隆寺建立当時の姿は、管長様どんなイメージでしょうか。</p>
		<p>おそらく聖徳太子さんは、法隆寺の完成を見ていないと思います。そして、643年に斑鳩宮が焼打ちに遭ったときも、まだ完成していなかったと思います。奈良文化財研究所の方々がおっしゃっていたことですが、塔の中から未使用の瓦が出てきます。つまり、屋根の上に乗せていない瓦が出てきたということから考えると、おそらく当時、</p>

		<p>塔は未完成だったのではないかという意見でした。私もその考えはあり得ることだと思います。</p> <p>平田 そうすると、607年は金堂ができたというイメージでしょうか。</p> <p>大野管長 おそらくそういうことだと思います。</p> <p>そして、薬師如来坐像の銘文が、実際に古いものを彫り直したということであれば、607年に金堂ができたということになりますが、そういう説もあるということです。また、『日本書紀』には606年に斑鳩寺という名前が出てきます。もちろん目的が違いますが……。ということは、その時代には斑鳩寺というのが存在したということですから、金堂だけはその頃に完成していてもいいのではないかなと思います。</p> <p>平田 この件につきましては、考古学の方でもそうではないかと考えられています。</p> <p>いま管長様がおっしゃられた606年についてですが、「法華経を講じて推古天皇大いに喜びて」ということで、播磨国、現在の兵庫県太子町に「斑鳩庄」という荘園が長らくあったということが伝わっております。また3つの寺で、いただいた水田を分有しているわけですが、そのところに法隆寺が入っています。607年に完成して606年が出てくるのはおかしいということはあるかもしれませんが、これは当然のことで、完成したのが607年であって、1年でお寺が完成するわけではありません。考古学の中でも、601年に斑鳩宮が造営される頃には、若草伽藍と言われているところの造成工事も同時に行われていて、宮が完成して、聖徳太子が移り住んだのは605年と言われているのですが、その頃にお寺の完成が間に合っていないようですが、607年に遅れてお寺が完成するといった流れだろうと考えられます。</p> <p>お寺の成立ですが、法起寺の塔の露盤銘にもありますように、法起寺の伽藍の成立にかなりの長い時間を要したということが書かれてい</p>
--	--	---

ます。管長様は法起寺の住職もされていますが、法起寺は638年に山背大兄王が造り始めて、完成するのが706年ということで、中心伽藍を造るのに60～70年かかっていますので、法隆寺成立とされる607年には、すべてが完成しているわけではなかっただろうと、考古学でも言われています。考古学でお寺を発掘したときに何に注目するかというと、「瓦」に注目します。軒瓦の文様も見めるのですが、それだけではなく最近では製作技法にも注目して研究をしています。日本に本格的な寺院ができたのは、みなさんご存知のように飛鳥寺です。これは蘇我馬子が造ったお寺ですが、このときの瓦の文様を比較していきますと、瓦の文様をスタンプのように押す「瓦範（がはん）」というものがありますが、間違いなくこれが飛鳥寺から斑鳩寺（いわゆる法隆寺）に移ってきていると考えられます。こうしたことから7世紀初めの頃に斑鳩寺が造られたというのは間違いないだろうと言えます。ちょうど金堂に使われていた瓦がその時期のものに合致するということが、瓦の考古学的研究の中でも言えます。

また塔につきましても、どういった瓦が使われているのかというのが瓦の研究でもわかってきています。私が発掘したときに、焼けている瓦の種類と焼けていない瓦の種類を分類してみました。そうすると塔によく使われていると思われる瓦がよく焼けていました。こうしたことから、670年に塔に落雷があつて金堂に延焼していったのだろうと考えられるわけです。ただ法隆寺成立の時代が微妙なところもあり、山背大兄王が亡くなられるあたりの時代の瓦がよく焼けているので、この時代に完成したのかどうか微妙なところですが、塔の完成にもかなりの時間がかかっているというのを、発掘の結果から感じました。

さて、銘文というのは法隆寺の歴史を考えるうえで重要なものです。『日本書紀』は720年に成立したのですが、法隆寺については焼けたときのこと書かれているものの、いつ法隆寺が成立したのかというようなことは書かれていません。しかも、その後再建されていく過程についても記されていません。そこで、法隆寺について考えると

きに、管長様からお話のあった金堂に祀られている仏像の光背銘文を読み解くということが重要となってきます。最近、東野先生が管長様がお話になられたようなことを、かなりわかりやすく解説していただいている本がありますので、ご興味のある方はその本を読まれるのもよいかと思います。

管長様、最後にですが、今日時間がなくお話しいただくことができなかった救世観音についても、少しお話しいただきたいと思います。救世観音は、皆様ご存知のように明治時代に東京帝国大学の教授で哲学・美学の先生でいらっしゃったフェノロサが、岡倉天心を随行して法隆寺に来られたときに、白い布で包まれた救世観音様を見られてすごく感動して、それから法隆寺さんのご理解を得られて公開に至るといったお話があります。秘仏としての取り扱いは現在でも続いており、春と秋の公開というのがありますが、この仏像を見られた方はいらっしゃいますでしょうか（挙手）。やはり少し期間限定ということもあって、少ないような気がします。ぜひみなさんにお越しいただきたいと思います。この救世観音についても聖徳太子の等身と言われていますが、管長様、この観音様についてのお考えなどがあればお話しいただきたいと思います。

大野管長

実は、この秘仏のことは『法隆寺東院資財帳』と『法隆寺東院縁起』の中に書かれておりまして、『法隆寺東院資財帳』には「上宮等身観世音菩薩木造壺驅金箔押」と書かれております。『法隆寺東院縁起』では「則ち八角の円堂に太子在世に造りたまうところの名救世観音像を造りたまう」と書かれています。要は聖徳太子さんの生き写しのようにした観音様であるというわけです。こういった思想は中国で古くからあり、皇帝に贈られる場合などによく行われます。この像は、夢殿が739年に建立されていますので、それまでの間にどこに安置されていたのか、実はよくわかりません。ただ、仏像としては、彫刻の先生が目の距離や耳の距離を測られると、金堂の釈迦三尊像の目と耳の距離と夢殿の救世観音の目と耳の距離とが同じであるというこ

		<p>とが分かったとおっしゃっていました。しかし、それだけでは、参考にはなるとは思いますが、証拠にはなりません。また夢殿ができてから観音様を見つけ出したと言われていたりもしますので、よくわかりません。しかし、聖徳太子の像として信仰されてきました。また面白いのは中世の書物には「太刀をはいた聖徳太子を見た」というようなことが書かれており、実際には観音様でしたが、ここから当時は僧侶でも見たことがなかったということがいえると思います。ただ、フェノロサさんが来られて調査されたことは確かだろうということですが、少し大げさに書かれていることもあります。それ以前に国の全国調査があり、岡倉天心も関わっていましたが、そのときの資料が東京国立博物館の資料館にありますので、実はフェノロサさんより先に救世観音は開かれているわけです。</p> <p>貴重なお話でしたが、この話は最近の研究でわかってきたことです。岡倉天心が付度したような形で、フェノロサ教授を案内したというような想像をしてしまいます。</p> <p>また、「上宮等身」ということで目や耳の距離についてのお話が管長様からありましたが、救世観音は間違いなく飛鳥仏であります。そうすると、夢殿が成立するのが奈良時代なので、その間救世観音がどこにあったのか謎となっています。いずれにしても、救世観音は、どちらかというとい仏様というより人のような感じを受ける仏像です。ぜひ秋の法隆寺にお越しいただければと思います。</p> <p>最後に、斑鳩町の有名な文化財として藤ノ木古墳もごぞいます。この秋の10月27日から12月2日まで、藤ノ木古墳の展示も行いますので、ぜひ斑鳩にお越しください。</p> <p>今日は長い時間ありがとうございました。</p> <p style="text-align: center;">～拍手～</p>
15 : 00	佐谷	大野管長・平田技師ありがとうございました。

15 : 00		<p>みなさん、拍手でお送りください。</p> <p style="text-align: center;">～拍手～</p> <p>みなさん、斑鳩の里の魅力を感じていただけましたでしょうか。</p> <p>これをもちまして、「法隆寺地域の仏教建造物」世界文化遺産登録25周年記念セミナー「聖徳太子のおもかげに会う斑鳩」を終了いたします。</p> <p>出口でアンケートを回収させていただきますので、ご協力いただきますようお願いいたします。</p> <p>また、本日、朝日カルチャーセンター・朝日JTB交流文化塾の受付奥のスペースで、斑鳩町の観光PRブースを開設しております。観光パンフレットのほか、斑鳩ブランドに認定されているおいしい食べ物や、斑鳩らしいグッズの販売もあわせて行っておりますので、是非お立ち寄りください。</p> <p>本日は、ご来場いただき、誠にありがとうございました。</p> <p style="text-align: center;">～閉会～</p>
---------	--	---